

# 復興の種と想い 届けよう

## 宇治の鍼灸整骨院

### 被災地支援にスタッフが協力

#### きょう 福島で開幕 「ひまわり甲子園」で活動紹介

放射性物質を吸収するといわれるヒマワリを復興のシンボルにする「福島ひまわり里親プロジェクト」に協力している宇治市内の鍼灸整骨院のスタッフが、福島市で開く初の「ひまわり甲子園」(9日、10日に開催)に参加し、全国発表者(5団体)の一員として患者やスタッフの協力で進めている治療院での取り組みを紹介する。鍼灸マッサージ師らが始めたチャリティーマッサージや治療院に設けた募金箱に寄せられた善意の総額は2年間で約150万円となり、放射能測定器や高性能マスクの購入費として福島のプロジェクト本部に届けたり、スタッフたちは「一過性に終わらない、息の長い活動を続けていきたい」と張り切っている。



打ち合わせを行なう(左から)小嶋さん、管理栄養士の三林さん、柔道整復師の西田さん

ヒマワリの種と想いを福島に届ける「ひまわり甲子園」に参加するのは宇治市伊勢田町で「のぞみ鍼灸整骨院」を経営する小嶋道範さん(38)とそのスタッフたち。ひまわり里親プロジェクトは福島市内で放射線量の独自調査などに取り組む人材育成会会社経営の半田真仁さん(34)ら若手経営者が集まって東日本大震災が起きた一昨年3月に立ち上げた。復興のシンボルにしたヒマワリの種(1袋50粒入り、500円)を購入し、全国各地で

育て、ヒマワリから新しい種を採取し、福島に送り返してくれる「里親さん」を募り、活動の輪を広げようという取り組み。ヒマワリの種の袋詰め作業が福島県内の知的作業所に通う人たちの仕事となっており、雇用を生み出し(雇用対策)、県外の人がヒマワリを育てることで福島を忘れない(風化防止)ことにつながる。種を送り返すことで全国各地と福島をつなぐ「絆」となり、福島で育ったヒマワリを里親さんが見に来ることで観光対策にもなる。などの

相乗効果を狙った。この間に福島県内の9千カ所でヒマワリが開花し、全国で約1万6千件の「里親さん」が誕生。目下はひまわりプロジェクトで生まれた福島と全国各地の

「絆」を絵本の物語として次代を担う子どもたちに伝えようと「ひまわり絵本」(作・はらきょうこさん)の取り組みが始まろうとしている。小嶋さんが半田さん



福島町の畑でスクスクと育った「ひまわり」小嶋さん提供

と知り合ったのは5年前のこと。半田さんは広島出身。放射線が人体に及ぼす影響には人一倍敏感で、震災が起きた直後に宇治の小嶋さん宅に10日間ほど緊急避難。今後、何をなすべきかを考え、浮かんだのが「ひまわり里親プロジェクト」。

小嶋さんは妻(38)が郡山市に近い須賀川市出身。同年5月には半田さんの紹介で福島市やいわき市などの避難所でマッサージなどのボランティア活動に参加した。被災した婦人に「何か手伝えることはありますか」と聞くと「福島を忘れないで下さい」と言われたことが胸に突き刺さった。半田さんらが始めた里親プロジェクトの活動を患者に紹介したところ、男性患者で福島町の畑の一角を快く提供してくれる人が現れ、1昨年は約500本のヒマワリを育て、40本の種を福島へ送り、昨年引き続きヒマワリを栽培。今では経営する3院

のスタッフ19人が様々な形で支援活動をサポートし、鍼灸整骨院で月1回発行している「のぞみ新聞」でひまわりプロジェクトを紹介。患者をはじめくちコミで知った市民からも支援の輪が広がっている。きょう9日から開幕する「ひまわり甲子園」には小嶋さんをはじめスタッフ4人が参加し、落語の心得のあるスタッフが軽妙な乗りとDVDを交え、福島から遠く離れた宇治で確実に根付いているひまわり里親プロジェクトについて報告する予定だ。

小嶋さんは「3歳ともうすぐ1歳になる2児の父親として福島の間取りは決まらずに他人事とは思えない。2年間の活動を通して継続することの大切さを学んだ。福島を忘れないでほしいと言った女性の言葉をこれからも大切に、気負わず地道な活動を続けたい」と話している。

【岡本幸一】